それいけ！　ホラー研究会！

聖騎士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
それいけ！　ホラー研究会！

【Ｎコード】
Ｎ７８５４Ｍ

【作者名】
聖騎士

【あらすじ】
不幸体質の男子高校生とホラー大好き美少女先輩の織り成すコメディホラー。「ホラ研」こと「ホラー研究会」は、「口裂け女」の噂を聞いて、目撃された商店街へ聞き込みに行く。そこで遭遇したのは……※「夏のホラー２０１０～百鬼集帖～」参加作品

（前書き）

※「夏のホラー２０１０～百鬼集帖～」参加作品

「遼哉、早くしなさい！」
「先輩、待ってくださいよ」
あまりの猛暑に蝉さえも元気のない8月上旬、僕とかなた先輩はある商店街に向かっている。吹き出る汗と朦朧とする頭で死にそうになりながらも、大きな入道雲を真正面に見ながら坂道を下る。
先輩のように霊的な存在が大好きな人はいいが、僕のように苦手なやつにとっては気が進まない。
「栄えある我がホラ研最初の研究対象よ！　血湧き肉躍らないの？」
「湧かないし躍りません」
「んもう、素直じゃないんだから」
「自分にはとても素直です」
十六夜（いざよい）かなた先輩は僕の一つ上の3年生。大学受験をするらしいが受験勉強をしている姿を見た覚えはない。もっとも常に学年トップで東大合格間違いなしといわれているかなた先輩にとっては、受験勉強などする必要もないのかも知れない。
「口裂け女が出る」という噂が流れ出したのは今年になってからだ。うちの高校のある「忌野町（いまわの）」は昔からこういうお化けの類の噂が絶えない。何でも大昔“忌野清志郎”という陰陽師がこの町いたことからそういう名前になったらしいが、お陰で超常現象も頻発するネタには困らない町になっている。ちなみにこの陰陽師の名前は「せいしろう」である。サクセションな名前ではない。
「先輩、行くのはいいんですけど、そう簡単に会えるわけないですよ」
このくそ暑い中涼しい顔をして長い黒髪を風になびかせるかなた先輩は、見惚れるほどの美人だ。
「忌野高校ホラー研究会」という怪しい研究会は、心霊現象の大好きなかなた先輩が作った会だ。会といっても会員は先輩と僕の二

人だけ。うちの高校のアイドルであるかなた先輩と二人きりということで、友人たちはみなうらやましがる。でもみんなわかってない。この先輩の恐ろしさを。

家が隣同士でお互いの両親も知っている。小さい頃から姉弟同然に育ってきた僕とかなた先輩とは、恋愛感情などは抱きようがない。きれいなことは認めるが、こんな人と付き合ったりしたらはっきり言って命がいくつあっても足りない。

最初の事件は僕が5才、かなた先輩が6才の時だった。「水死者の霊を見た」という噂を聞きつけたかなた先輩は、怖がる僕を無理矢理噂の淵へと連れ出した。昼なお暗いその淵で溺れかけたことは、今でも僕のトラウマとなっている。不公平なのはかなた先輩には何も起こらなかったのに、緑色に淀む水に僕が一歩足を踏み入れた途端強烈な力で水の中へ引き込まれたことだ。

僕はどうやら霊的な存在を引き付けやすい体質らしい。それがかなた先輩の作ったホラー研究会、通称「ホラ研」に僕が引き込まれた理由だ。

「きみがいればきっと会えるよ」

夏の日差しよりまぶしい笑顔でそう言われると、何だか恥ずかしくなってきてしまう。裏を返せば「エサになれ」と言われているのに。

日傘を差してのんびりと歩く老婆。乳母車を押すノースリーブワンピースの若い母親。作業服を着て汗を拭きながらビールケースを運ぶ酒屋のおじさん。「忌野銀座通り」と呼ばれるここは、日本全国どこにでもあるようなありふれた商店街だ。

「すみませぇん、口裂け女見かけませんでしたかぁ？」

「ぶっ！」

白いセーラー服姿で後ろ手を組むかなた先輩が、軽トラックに重そうなビールケースを積んでいる作業服のおじさんにこやかに声をかける。くそ暑い中懸命に労働しているおじさんにしてみれば、

からかわれていると勘違いしてもおかしくない。僕はかなた先輩の腕を掴んで慌てて引き戻す。
「遼哉、痛い！　いきなりなにすんのよ！」
「なにって先輩、いきなり直球ど真ん中過ぎますよ！」
ほら、おじさんが変な顔してる。怒られても知りませんよ。
「なんだいお嬢ちゃん、夏休みの自由研究か何かかい？」
て、反応普通！　おじさんタオルで汗拭いてる場合じゃないっすよ。何聞かれたかわかってんですか？
「ほら大丈夫でしょ？　この町の人はこういう話慣れてるんだから」
かなた先輩はポケットから、赤いベストを着た下半身丸出しのクマのキャラクターが表紙に描いてある黄色いメモ帳を取り出す。先輩は頷きながらおじさんの話を聞き、ときおりすばやくメモを取っている。僕は少し離れたところでその様子を見る。
何が悲しくて夏休みの真っ只中、制服を着て外を歩き回らなくてはならないのだろう。美人の先輩と二人で歩くというシチュエーションは確かに他人から見ればうらやましいかもしれないが、目的が昔懐かしい口裂け女では素直に帰りたい。
「遼哉、重要な情報がわかったわよ。西通りの方で、昨日の夜目撃されたって」
「はぁ」
意気揚々と歩いていく先輩の華奢な後姿を追いながら、僕は深くため息をつく。どうせなら「デマでした」で終わってほしかった。その後もかなた先輩は道行く人を捕まえては直球ど真ん中の調査を続ける。みんなにこやかに対応するって、どんだけ慣れてんだ？
夕方近くまで聞き込みをしてさすがに疲れたのか、かなた先輩は喫茶店で一休みをしようと言い出した。僕はただついて回っていただけなのだが、あまりの暑さに喉はカラカラ、頭はぼうっとして倒れる寸前だ。激しく頷いて同意すると、先輩は一軒の喫茶店へ入る。
「黒薔薇」という、古そうだが質素で落ち着いた感じの店だ。
「では聞き込み調査の結果をまとめます」

アイスレモンティーを一気に飲み干した先輩は、さっきのメモ帳を取り出す。話を聞きながら書いていた割には、とてもきれいな字だ。
「一つ、口裂け女は西通りでよく目撃されている」
白くて細い人差し指が、僕の顔の前に立てられる。
「二つ、時間帯は午後七時から九時にかけてが最も出現しやすい」
夜か。田舎の商店街だから、八時にはほとんどのお店が閉まってしまう。つまりその頃は人気も少ない。
「三つ、捕まると食べられる」
おい。ちょっと待て。
「四つ」
スルーか！　そんな重要情報スルーするのか？
「年齢は二十代後半から三十代前半、白いワンピースを着て長い黒髪、大きめのマスクを着用している」
口裂け女ってのはレインコート姿じゃなかったっけ？
「マスクには『喧嘩上等』と書いてある」
レディースですか？　ワンピースじゃなくて特攻服の間違いじゃないですか？
「五つ、名前は磯崎香苗さん。職業は保育士、現在恋人募集中。ツイッターでのＨＮは“かなりん”」
僕は全身の力が抜けてソファにもたれる。どうしてそこまで詳細にわかるんだ？　ってか名前や職業がわかるなら、正体バレたようなもんだろう？　しかも恋人まで募集しちゃってるし。
「以上、謎は深まるばかりね」
いや、深まってないから。これ以上ないくらい判明してますから。僕がどれだけ心の中でツッコミを入れても、かなた先輩は不敵に微笑み、アイスコーヒーを一気飲みする。僕のまだ一口しか飲んでいなかったアイスコーヒーを。
「まずは西通りに行ってみましょ。そこで聞き込みと張り込みよ！」
氷しかなくなったグラスを音高くコースターに置くと、かなた先

輩はさっさと立ち上がる。涼しげなカウベルが鳴ってかなた先輩が出て行くと、エアコンの風に揺れるレシートが一枚、こげ茶色のテーブルの上で揺れていた。

「ここが現場ね」

濃紺の空に一番星がきらめいている。遠く西の山の稜線が真っ赤に染まり、次第に夜の帳が下りてくる。ああもう夕食の時間だ。

かなた先輩は白いガードレールから身を乗り出して、通りの左右に視線をめぐらせている。等間隔に並んだ白い街灯が点灯し始め、道行く人の足も心なしか急いでいる。通りを走る車も、ほとんどがヘッドライトを点ける時間帯。何が悲しくてこんなところにいるのだろう。

「聞き込みしたいけど、あんまり人いないねぇ」

それは当然だろう。夏の暑い一日働いて、今は自宅で汗を流してビールでも飲み始まっている時間帯だ。すると通りの向こうから一人の女性が歩いてくる。

「あ、誰か来た。遼哉、突撃今夜の晩ゴハン！」

いや、わけわかんないですから。暑さにさすがの先輩も脳がやられましたね。ツッコむ間もなく、かなた先輩はさっさと女性の方へ歩いて行ってしまう。僕は慌てて後を追うが、すぐに動けなくなってしまう。俯き加減でよくわからないが、女性は白いワンピースに長い黒髪、しかも大きなマスクをしている。マスクには“喧嘩上等”。

「すいませぇん、この辺で白いワンピースを着た長い黒髪で、大きなマスクをした女性を見かけませんでしたかぁ？」

いやいやいや！　あなたの目の前にいるのがそうでしょうが！

僕は危険を感じて走り出す。

「いえ、見かけませんでしたよ」

「あれぇ？　あなたどこかで見たような……」

かなた先輩は俯いた女性のさらに低い位置へしゃがみ、下から顔

を覗き込む。チャレンジャーっすね！
「き、気のせいです」
女性はかなた先輩を回り込むように避け、歩き出す。必然的に僕と鉢合わせする。僕の存在に気づいた女性は、はっとして足を止める。
「はさみ撃ちか。やるな」
いやいやいやいや！　そんなつもりありませんから！　どうぞご自宅へお帰りください、香苗さん！
「遼哉、そいつ怪しいよ！　捕まえて！」
「ええっ？」
あたふたとする僕に、かなた先輩の鋭い声がかかる。追い詰められたと思ったのか、女性はマスクを外す。
「うわあぁ！」
夜の商店街に僕の叫び声がこだまする。マスクの下から出てきた顔は、まさに“口裂け女”だった。
「見ぃたぁなぁ～！」
女性＝口裂け女は、耳まで裂けた口を大きく開く。真っ赤な口腔内には鋭い牙が並び、黒い髪を乱しながら血走った眼で僕を睨む。腰が抜けて尻餅をついてしまった僕は、手をついてお尻で後ずさる。
「せ、先輩、助けてください！」
「ポマードポマードポマード！」
かなた先輩は忍者のように人差し指を立てて両手を組み合わせ、なにやらつぶやいている。
「そ、その言葉は！」
口裂け女はかなた先輩の言葉を聞くと、明らかに狼狽し始める。そういえば噂で聞いたことがある。口裂け女に会ったら「ポマード」と3回言えば狼狽し、その隙に逃げればいいという伝説がある。
「や、やめろ！　その言葉を言うな！」
口裂け女は真っ赤な口を開き、両手で頭をかきむしる。いいぞ、効いてる！

「遼哉、なにしてんの！　早く逃げなさいよ！」
苦しむ口裂け女の背後で、かなた先輩が叫んでいる。それはよくわかっているのですが、腰が抜けて立てません！
お尻でずりずりと下がる僕を、口裂け女がぎろりと睨む。やばい、「ポマード」の効果が切れた！
「どうした！」
すると横の路地から昼間会った作業服の酒屋のおじさんが走って来る。僕たちの声を聞いて駆けつけてくれたに違いない。
「あ、お前は！」
おじさんは口裂け女を見て驚く。そりゃそうでしょ、伝説の存在が目の前にいるんだから。
「香苗さん、またかい」
「へ？」
おじさんは口裂け女へすたすたと近づくと、地面に落ちた彼女のハンドバックを取り上げる。
「お嬢ちゃんたち、びっくりしたろ？　でも香苗さんを許してやってな。この娘、整形が失敗して彼氏に振られてヤケになってんだから」
「えええっ！」
口裂け女、もとい磯崎香苗さんは恥ずかしそうにマスクをつける。
「私の元彼ポマードが大好きだったの。その言葉を聞くと元彼を思い出してしまって……」
まじですか。
「香苗さんは元レディースでな、この辺じゃかなり名前の売れた暴走族の頭張ってたんだぜ」
おじさんは鼻をこすって得意気だ。いや、あなた昼間かなた先輩に口裂け女の情報伝えたんでしょ？
「じゃあ、噂の口裂け女って……」
かなた先輩が残念そうにおじさんに聞く。おじさんはにかっと笑って香苗さんの肩を叩く。

「そ、この娘だ。びっくりしたろ？」
「びっくりって……　はぁ」
結局僕たちは香苗さんに謝って家路に着いた。
「何だかつまんないオチよねぇ。遼哉が齧られるくらい期待してたのに」
おい。
「整形か……」
星のきらめく夜空を見上げながら、かなた先輩はため息をつく。
「ね、遼哉。あたしが整形したいって言ったらどうする？」
「え？」
かなた先輩の大きな瞳の中に、星がたくさんきらめいている。僕は思わずどきどきしてしまう。
「せ、先輩は整形なんかする必要ないんじゃないですか？」
「そう？　えへへ、ありがと」
かなた先輩は鼻歌を歌いながら、手を振って帰って行く。何だか今日は無駄な一日だった気がする。でもまぁかなた先輩が満足したならそれでもいいか。こんなこと、僕以外に付き合ってくれる人いなさそうだし。
「ねぇ」
かなた先輩が自宅の玄関へ消えると、横合いから声をかけられる。振り返るとそこには大きなマスクをしたレインコートの女性。
「あたしきれい？」
マスクを外すと耳まで裂けた大きな口が開く。僕はそのまま気を失った。
「遼哉、遼哉！」
はっとして気がつくと、かなた先輩の顔が目の前にある。
「あ、あれ？　ここは？」
よく見るとここは自分の部屋だ。僕はベッドに制服のまま横たえ

られ、タオルケットをかけられている。額には解熱シートが貼り付けられてある。
「よかった。あたしの家の前で倒れてたから、遼哉のお父さんに言ってここまで運んでもらったんだよ」
「倒れてって……　あ、そう言えば！」
　僕は思い出す。大きなマスクに季節はずれのレインコート。そして何よりもあのセリフ。僕はかなた先輩に説明する。かなた先輩は真剣な顔でうなずきながら聞き、深く長いため息をつく。
「だから遼哉は気を失ったのね、残念だなぁ！」
「どういうことですか？」
　僕はむっとしてしまう。かなた先輩は僕が口裂け女に殺されてもいいのだろうか。
「遼哉は自覚ないと思うけどね。あなた気を失ってからすごいのよ」
「え？」
　かなた先輩に聞いて初めてわかった。僕は気を失った後、とんでもない力を発揮して霊を成仏させてしまうらしい。
「あの時もすごかったわよぉ。たくさんの水死者の霊が泣いて謝ってたし。本物の口裂け女がやられるとこ見たかったなぁ」
　僕の苗字は「忌野」。父の話によれば、この町の創設者「忌野清志郎」の子孫らしい。つまり由緒正しい陰陽師の子孫なのだ。僕は絶対認めたくはないが。
　かなた先輩は僕のこの能力を当てにして、ホラ研を始めたらしい。霊を引き付けやすく、退治できる僕の能力を。
「そういえば我がホラ研に明日から新入会員が来るわよ。なかなか個性的なメンバーらしいわ、楽しみね。そうそう、それに次は町外れの廃病院に行くわよ。かなり強烈な地縛霊が大量にいるみたい！　た・の・し・み・ね！」
　かなた先輩はそういってウィンクする。忌野遼哉１７才、ホラーな青春はまだまだこれからのようだ。

（後書き）

※元々は長編連載用の設定を無理矢理掌編にしてしまいました＞＜
怖くなくてごめんなさい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7854m/

それいけ！　ホラー研究会！

2011年2月9日14時10分発行